

一般的なハーブをアーユルヴェーダの見地からその用法を解説している所に大きな特徴がある。また各論全体を通して、漢方の常用薬物、例えば桂枝、麻黄、地黄、甘草、朝鮮人參、生姜、艾葉、山薬など多く含まれているので漢方薬的な使用法とアーユルヴェーダの効用とを比較できるのもおもしろい。

日本ではまだ西洋薬が圧倒的シェアを占めているが、世界的見地に立てば、西洋薬のウエートは高々二割にすぎない。約八割は薬草を中心とする自然薬である。その理由は高価格、技術者不足、文化度の低い地域が多いこととさまざまであるが、最近ではヨーロッパ、アメリカにおいてもWHOの活動や代替医療の広まりとともに薬草療法の見直しが行われている。地球資源が限られている中で、循環可能な資源は植物しかないのであるから、この方向は好ましいものと言える。現在WHOの活動の一つとして、薬草の世界的基準を作ろうとしているがその歩みは遅い。同じ薬草でも地域や民族によつて異つた効用や用法があるので、一つの薬草を世界的視野で見るとは大へん意義深い。そこには古くからある薬草に新しい使用法がでてくる可能性が高いからである。そのような意味で日常よく用いられるハーブや漢方薬をアーユルヴェーダの見地から比較することのできる本書の価値は高い。おしむらくは漢薬名の同定が可能なものには漢薬名を付けていただいた方がよかつたと思う。これは本書に限らず一般的な問題点であるが、本書の題にもなっている「ハーブ」と

いう言葉に専門的な定義がなされないまま一人歩きしていることである。起源は『聖書』のラテン語訳の *herba* であつたと考えられ、もともとは地中海沿岸の草本系植物の地上部を意味していたようであるが、今では薬草、薬木、香辛料を中心として果実や野菜の一部まで含んだ解釈がなされている。この辺で一考してはと思う次第である。

出帆新社はインドものなら損得かえりみないユニークな出版社である事を附記しておく。

(根本 幸夫)

〔出帆新社、世田谷区経堂二―二四、電話〇三一三四三九―〇七〇五、平成十二年五月一日、A五判、四三五頁、本体価格四〇〇〇円〕

森川 政一 著

『昭和前期上越医界史』

著者は明治中期に創立した新潟県下私立病院の名門知命堂病院理事長であり、外科の俊秀として名声をほしきままにした臨床医の学究である。

すでに、『知命堂百年史』『知命堂病院附属産産看護婦養成所史』『明治・大正上越医界史』の名著があり、既刊の『高田市医師会史』(一九九八年)・『糸魚川市西頸城郡医師会史』(二〇〇一年) 編纂の顧問として実質的な指導をしてきた、地方医事史研究の実力者である。知命堂病院はウイリス

に指導を受けた創業者瀬尾玄弘、初代院長瀬尾原始以来、私立医科大学設立を目標に人材の育成に努力した新潟県医療界のユニークな存在であった。また、新潟県の西南部の、富山県、長野県と県境を接する上越地方(旧高田市、直江津市、新井市、中頸城郡、東頸城郡、西頸城郡)では旧公立高田病院(現・新潟県立中央病院)と共に医療の中心的存在で、創立以来この地方の医事・衛生に関する貴重な資料が所蔵されている。さらに著者が創業者瀬尾家の血縁でもあり、累代にわたり地区医界では知名な存在なので、執筆情報が正確かつ豊富である。その資料で『明治・大正上越医界史』(一九九〇年)を刊行された。殆ど戦争に終始した昭和元年から昭和二十年までを前期とし、自家資料を主とし高田日報、高田新聞及び郡市医師会所蔵資料を駆使して、日本の激動期であった二十年間の新潟県西南部地方の医療界の動きをまとめあげたのがこの著作である。

医療界からみると医学そのものがまだ不確定の時代であり、急性伝染病、慢性伝染病に悪戦苦闘する時代でもあった。本書は「上越地方の伝染病」との戦いのあゆみから始まる。ついで各郡市医師会結成とその活動のあゆみが正確な記録に基づいてまとめられてある。官製のな医師会であったが地方独自の医学啓蒙活動、医療奉仕活動が組織的に行われていたことが詳細に記述されている。

昭和十一年には上越聯合医師会が歯科を含めて結成されており、計二百十名からなる医療専門団体が結成され、医学集

談会などの学術の研修組織が活動し、次第に医療機関が整備されてゆく。これらの医療機関の設立状況について高田病院、高田脳病院、高田衛戍病院、柿崎病院、上越医療組合病院、頸南医療組合病院などユニークな設立事情の紹介がある。その他の民間病院および公的医療機関、産婆、看護婦養成機関についても刻明な調査記録が要領よくまとめられている。

戦中の疎開児童の健康管理の記録は貴重な証言であり、埋没されがちなものをよく取りあげてある。最も興味があるのは一〇〇頁にわたる第十一章「上越医界余話」である。

第一章「上越の遊廓と性病対策」の項は著者が行った調査資料に基づいて詳述してある。

この項は明治・大正にさかのぼり検梅制度の地方への定着経過を詳細に地方色豊かに記述している。港町としての直江津、かつて陸軍の師団司令部のあった高田という性病の巣窟についての地方的な探索とあいまって面白い読み物となっている。このなかで全県の視点でも論及されてあるので、他の地区における性病対策の動向も知ることができる。

人物伝は、会津藩降伏人病院医師中川昌泰、パークインスの門下生黒田虎太郎、また歯科医江川鈴彌、夏目漱石の主治医であり、著者の伯父にもあたる森成麟造についての詳細な記載等は城下町高田でなければと思わずにはいられない筆致で読む者を飽かせない医学史話の中のアアシスとなっている。

現在でもそうであるが、上越地方は文化的な面では県都である新潟市よりも上位にあり、長岡市と共にその文化的伝統

に誇りを持っている。それに、長岡市のように明治戊辰戦争、第二次大戦による二度の戦災を受けるといふこともなく、大火もなく、歴史的資料の保存が公・私ともに整っている。

このような文化的条件を著者は十二分に活用し、各時代を要領よく区分し、この『昭和前期上越医界史』をまとめられたが、この後の「昭和中期」を編集し、また、「昭和後期」をさらにまとめてみたいと「あとがき」でその抱負を述べられている。是非ともその実現を望みたい。

巻末にまとめられている「医師名簿」は単なる医師名の羅列でなく、昭和前期とは言うものの、明治・大正・昭和の三代にわたって生きたこの地方の医師・歯科医師一人一人についての詳細な履歴書であり、業績目録とも言えるものである。これらの人々のさらなる詳しい事績調査には欠くことのできぬ基礎資料でもあり、鍵でもある。

索引も調っているので検索も容易である。

本学会員という人を得た地方医史の好著と言うことができ。新潟医事史研究には欠かすことのできぬ必携書である。

(蒲原 宏)

〔私家版、千九四三—〇八三四 上越市西城町三—三—二八、電話〇二五五—二三—二五八七、平成十二年十一月、A五判、四一六頁、自費出版〕

編集後記

さきの九月の仙台における第一〇二回学術大会は期待通りの盛会でした。吉田忠会長以下、スタッフの皆様方には心より感謝申し上げます。

抄録号の原稿提出に関しては、当日の評議員会の席上で深瀬委員長より報告・要請がありました。毎年、執筆規定に必ずしも則っていない原稿がいくつもあり、編集委員一同、校正作業には腐心しています。たとえば文字数が規定に満たないもの、逆に多すぎて刷上り二頁では収まらないもの。仮に文字数が規定内であっても、改行を頻繁に繰り返すと収まらなくなります。また常用漢字と旧漢字（正字）の混用（特別の理由がなければ常用漢字の使用が原則）、パソコン（ワープロ）操作ミスによる誤植など。いったん受理されますと校正の段階では著者と連絡をとる時間的余裕がなく、当方の判断で改変せざるを得ないケース、あるいはミスとは思っても確証が無いため、そのまま印刷せざるを得ないケースもあります。重ねてご配慮のほどお願い致します。

このところ投稿論文が多く、嬉しい悲鳴をあげています。矢部く三輪編集委員長の平成元く二年頃には投稿の少なさに苦慮し、その後特集を組むなどして凌ぎ、切り抜けた頃のことを思うと隔世の感があります。

私は昭和六十一年に編集委員を拝命しましたが、同時に編集委員に就任され、のちずっと本会誌の編集刊行に力を尽くされた大村敏郎先生が学会を前に他界されました。去りし日のことどもが懐かしく想い返されます。御冥福心からお祈り申し上げます。

(小曾戸 洋)